

(2) NECTA会長賞

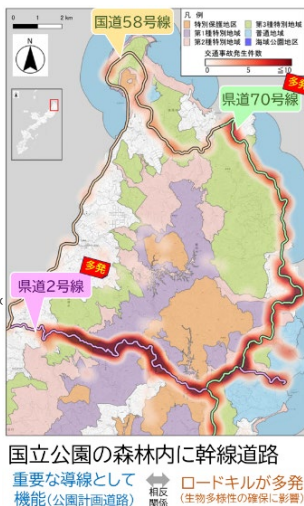
やんばる国立公園におけるロードキル対策
—ドライバー目線からの新たな対策の検討—
いであ(株) 杉本 嵩臣・佐藤 泰夫

やんばる国立公園におけるロードキル問題

やんばる国立公園は沖縄島北部に位置し、大陸や日本本土から切り離されて形成された固有な生物相や文化が特徴である。「亜熱帯の森やんばる—多様な生命(いのち) 育む山と人々の営み—」をテーマとし、固有性の高い希少な動植物が生息・生育する自然を尊重しながら地域の生活と文化を守り、生物多様性と亜熱帯森林生態系を体験できる国立公園を目指している。

世界自然遺産への登録の際、世界遺産委員会より絶滅危惧種の交通事故死(ロードキル)を減らす取り組みが求められたことでロードキル対策が喫緊の課題となっている状況の中、今後の公園の利用増加が見込まれ、ロードキル問題はより深刻なものとなる可能性が高い。沖縄県自然保護課は「希少種交通事故防止・密猟対策事業」としていであ株式会社へ一部事業を委託し、課題解決に取り組んでいる。

やんばる国立公園に位置する国道58号線、県道2、70号線は重要な導線として公園計画上の利用道路に指定されているが、野生動物の生息域に隣接していることからロードキル多発区間となっている。特に絶滅のおそれの高いヤンバルクイナとケナガネズミは過去10年間で年間27~77件もの事故が発生し、その8割が県道2、70号線での発生である。これまでの対策で事故件数は減少したものの、未だ高止まり状況にあることから、既存対策の評価と新規対策の検討が必要と考え、「ロードキル対策に資する基礎情報の収集・ロードキル要因の多面的な解析及び評価・対策手法の検討」に取り組んでいる。本稿では「対策手法の検討」について概要を報告する。なお、「ロードキル要因の多面的な解析及び評価」については自然公園専門誌「国立公園 2024年10月号」に掲載している。



対策手法の検討—除草対策の取り組み

やんばる国立公園が抱える課題の一つに、路肩植生の繁茂が挙げられる。繁茂した植生はドライバーの視線を遮り野生動物の視認性を低下させるほか、植生が動物の隠れ場や採餌場となり道路へ近寄せる原因となる。亜熱帯気候の沖縄島では、植生の繁茂が早く、維持にはこまめな刈払いが必要となるが、ロードキル発生区間だけで約36 km以上もの距離があり、維持管理費用は大きくなる。そこで本事業では新たな除草手法の検討、実地試験、除草効果及びコストの評価を行った。

効果的な除草手法の検討

道路路肩にて、刈払除草と温水除草の2通り、厚みの異なる防草シート2種の組み合わせで試験区を設けた。植生繁茂は樹冠被度に影響されると考えられたため、明環境と暗環境を2地点ずつ設定し、モニタリングを実施した。

結果は以下の①、②に示すとおりであり、刈払除草と薄手の防草シート(厚み1.3mm、PET不織布/PP織布の二層)の敷設が、やんばる国立公園周辺での効果的な除草手法であると考えられた。

① 除草手法の評価

- ・刈払除草と温水除草は除草後約7か月目に同様の再生程度となった
- ・温水除草箇所では変色したフトミズミ類の死体を確認

▶土壌動物・希少植物への影響がある可能性が示唆された



② 防草シートの評価

- ・設置後1年9か月経過後も日光等による経年劣化なし
 - ・明環境下ではイネ科植物による下からの突抜けを確認、その後の生長は無し
 - ・暗環境下では植生再生が緩慢なため、草地林縁部に依存する希少植物へ配慮し、シートを設置しない
 - ・シート上の落葉や土砂から植物の萌芽を確認
- ▶年1回程度の除去作業が必要



広域での実験的实施

近年ヤンバルクイナのロードキルが増加している県道2号線、70号線の約1kmの広域区間において、上記の除草手法を実地適用した。現状、植生が繁茂しやすい夏季を経過しても、概ね繁茂を抑えられている。しかし、外来種アメリカハマグルマが覆い被さるように繁茂する状況や、路肩のコンクリート間隙からの繁茂が確認されているため、これらをどう解決するかが今後の課題である。

最後に

当社は、コーポレートスローガン「人と地球の未来のために」を掲げており、やんばる国立公園におけるロードキル問題の解決に向けた取り組みに関して、関係者と協働し取り組んでいる。絶滅危惧種と人の共存により持続可能なやんばる国立公園の未来を確保するために、今後もロードキル解決に向けて積極的に取り組む所存である。